

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1983年度

1984年3月

豊中市教育委員会

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1983年度

1984年3月

豊中市教育委員会

## 序 文

豊中市は、大阪府の北西部に位置し、大阪のベッドタウンとして、戦後、急速に成長してきた町であります。

本市は緑なす千里丘陵と猪名川によって育まれた沃野にあり、安定した生産基盤と自然に恵まれて栄えた悠久の地であります。

しかし、近年にみる開発はとどまるところなく、一層激しく、土地を、景観を、変貌させています。

開発と保護、これは古くて新しい問題であります。私達は先人の文化遺産を謙虚に受けとめ、十分に認識し、現代の社会に活かしていくかなければなりません。

この報告書は、以上のようなことを踏まえ、危機に直面している遺跡について、国並びに大阪府の援助を受けて実施した調査の概要報告であります。この調査で得られたものは微々たるものですが、この作業を繰返すことにより点が面となり、先人のくらしぶりが明らかにされ、現代社会に活かされる日がくることを確信しています。

なお、調査にあたっては、多くの御指導をいただいた諸先生をはじめ、土地所有者の方々には文化財の重要性を御理解いただき、積極的に御協力いただきました。また文化庁、大阪府教育委員会並びに関係機関には格別の御指導と御協力をいただきました。こうした関係各位からの御協力に支えられて、文化財行政がより一層押し進められることに対し、関係者の皆様に心から御礼を申し上げます。

昭和59年3月31日

豊中市教育委員会

教育長 湯元英世

## 例　　言

1. 本書は豊中市教育委員会が昭和58年度国庫補助事業（総額3,000,000円、国庫50%、府費25%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査概要報告書である。

2. 本年度の調査は新免遺跡（5個所）螢池北遺跡の二遺跡について実施した。調査は昭和58年6月22日から昭和59年3月31日までの間、発掘調査並びに整理作業を行なった。

3. 本書の執筆は下記の者が分担して行なった。

新免遺跡	I～II	柳本照男
第4次調査地点		服部聰志
第6次調査地点		柳本照男、田上雅則
第7次調査地点		柳本照男
第8次調査地点		柳本照男
第9次調査地点		小嶋久夫
螢池北遺跡	第2次調査地点	橋本正幸、中村のり代

4. 遺物写真、図版は柳本が担当し、服部聰志の協力を得た。

5. 調査の進行にあたって、豊中市文化財保護委員藤沢一夫氏、また亥野彌氏より、御指導、助言をいただいた事に対して感謝いたします。

## 本 文 目 次

### 新 免 遺 跡

Iはじめに.....	1
II周辺の遺跡.....	2
III調査の概要.....	3
第4次調査地点.....	3
第6次調査地点.....	10
第7次調査地点.....	17
第8次調査地点.....	18
第9次調査地点.....	21

### 螢池北遺跡（第2次調査地点）

I調査の経緯と地理的環境.....	26
II調査の概要.....	27
III要約.....	31

## 挿 図 目 次

第1図 各調査地点位置図	1
第2図 周辺遺跡分布図	2
第3図 第4次調査地点トレンチ配置図	3
第4図 第1-2トレンチ平面図	4
第5図 第4次調査地点 出土遺物実測図	6
第6図 第4次調査地点 出土遺物実測図	8
第7図 第4次調査地点 出土遺物実測図	9
第8図 第6次調査地点トレンチ配置図	10
第9図 各トレンチ平面図・断面図	11
第10図 SK-02平面図・断面図	12
第11図 第6次調査地点 出土遺物実測図	13
第12図 第6次調査地点 出土遺物実測図	14
第13図 第6次調査地点 出土遺物実測図	15
第14図 石器実測図	16
第15図 第7次調査地点トレンチ配置図	17
第16図 第1トレンチ平面図・断面図	17
第17図 第8次調査地点トレンチ配置図	18
第18図 第3トレンチ平面図・断面図	19
第19図 第8次調査地点 出土遺物実測図	20
第20図 第8次調査地点 出土遺物実測図	21
第21図 第9次調査地点トレンチ配置図	22
第22図 第9次調査地点平面図・断面図	23
第23図 第9次調査地点 出土遺物実測図	24
第24図 石器実測図	25
第25図 第9次調査地点 第2トレンチ遺構検出状況	25
第26図 調査地点位置図	26
第27図 層序断面実測図	28
第28図 第2次調査地点平面図	28
第29図 第2次調査地点 出土遺物実測図	32

## 図 版 目 次

- 図版 1 新免遺跡・第4次調査地点
  - (1) 第1-2トレンチ遺物出土状況
  - (2) 第1-2トレンチ井戸検出状況
- 図版 2 新免遺跡・第6次調査地点
  - (1) 第2トレンチ遺構検出状況
  - (2) 調査地近景
- 図版 3 新免遺跡・第6次調査地点
  - (1) SK-02断面状況
  - (2) SK-02遺物出土状況
- 図版 4 新免遺跡・第7次調査地点
  - (1) トレンチ配置状況
  - (2) 第1トレンチ遺構検出状況
- 図版 5 新免遺跡・第8次調査地点
  - (1) 調査地近景
  - (2) グリッド配置状況
- 図版 6 新免遺跡・第8次調査地点
  - (1) 溝状遺構内遺物出土状況
  - (2) 溝状遺構検出状況
- 図版 7 新免遺跡・第9次調査地点
  - (1) 調査地近景
  - (2) 遺構検出状況
- 図版 8 蛍池北遺跡・第2次調査地点
  - (1) 遺構検出状況(平面)
  - (2) 遺構検出状況(南方向から)
- 図版 9 新免遺跡第4次調査地点出土遺物
- 図版10 新免遺跡第4次・第6次調査地点出土遺物
- 図版11 新免遺跡第6次・第8次調査地点出土遺物
- 図版12 新免遺跡第9次調査地点出土遺物

# 新免遺跡

## I.はじめに

新免遺跡は阪急豊中駅の西方一帯に広がる弥生時代中期から江戸時代に至る複合遺跡である。その中でも、特に古墳時代後期の遺跡範囲が大きく広がっている。

この地域の宅地開発は古く、現在では老朽化し、建替えが多くなってきている。遺跡は台地上に立地しているため、遺構面までの深さはそれほどなく、木造住宅の基礎工事でも十分壊される恐れのある所もある。

このような状況の中で、今回の報告は昭和58年度の緊急調査として実施したものであり、それぞれの調査地点のものを一括して報告するものである。

第4次調査地点	玉井町2丁目17番地	昭和58年6月22日～昭和58年7月1日
第6次調査地点	玉井町3丁目22番地	昭和58年9月26日～昭和58年10月15日
第7次調査地点	末広町1丁目100番地	昭和58年10月1日～昭和58年10月8日
第8次調査地点	末広町1丁目107-1.2番地	昭和59年2月6日～昭和59年2月14日
第9次調査地点	玉井町2丁目181-6番地	昭和59年1月19日～昭和59年1月30日



第1図 各調査地点位置図

## II. 周辺の遺跡

新免遺跡は豊中市玉井町3丁目付近一帯に広がる弥生時代から近世に至る複合遺跡である。遺跡は千里丘陵から派生する通称豊中台地の一丘陵上の先端部に立地している。北側は千里川が流れ、西方は西摂平野の低地部が開けている。この台地上には、多くの遺跡が存在する。東方には本町遺跡、新免宮山古墳群、金寺山廃寺遺跡と続き、南方は山ノ上遺跡、桜塚古墳群、原田遺跡、曾根遺跡などがある。北方は千里川を挟んで、御神山古墳、刀根山塗棺出土地、堂池東遺跡、堂池北遺跡、宮ノ前遺跡などがある。一方西方の低地には、箕輪遺跡、堂池西遺跡、空港A・B地点、勝部遺跡、田能遺跡と著名な遺跡が存在する。いわゆる西摂平野東部の中心地帯である。



第2図 周辺遺跡分布図

### III. 調査の概要

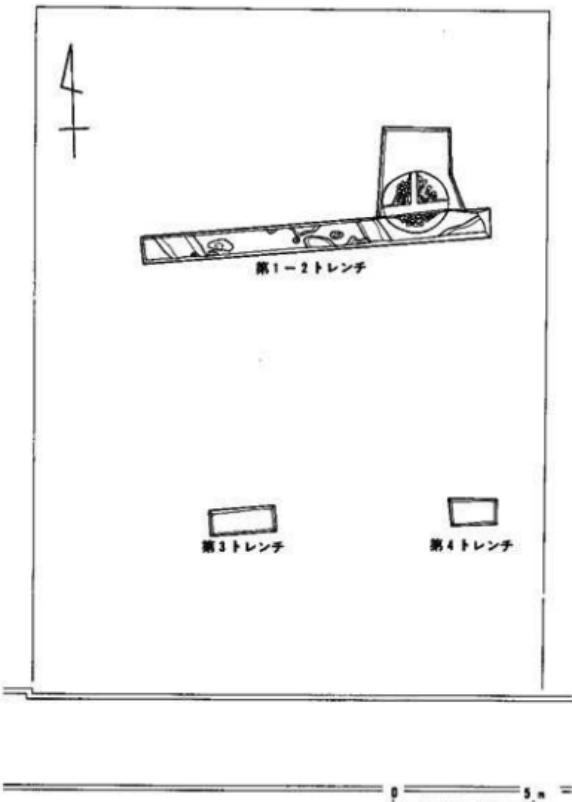
#### 第4次調査地点

調査地点は豊中市玉井町2丁目179番地に所在する。当初、敷地面積450m<sup>2</sup>の範囲内に1m×3mのトレンチを東西に2本づつ平行に、計4本設定した。調査の結果、遺構は北側の第1・2トレンチにおいてのみ検出されたため、その間を拡張し第1-2トレンチとした。また第2トレンチで井戸の肩を検出したため、一部を北側に拡張した。

#### 1 各トレンチの概要

##### 第1-2トレンチ

基本層序は4層からなる。第1層は粘土ブロックを含む暗褐色粘質土で、瓦礫を多量に含んだ近代以降の整地層である。第2層は青灰色砂質土で、少量ではあるが陶磁器片が含まれることから、近世以降の堆積土と考えられる。第3層は弥生土器、須恵器、土師器等、長期に亘る遺物を多量に含んだ茶褐色粘質土である。遺物の出土状況から見る限り、明らかに整地に伴う擾乱土と見られる。またこの層の上面は近世の遺構面に相当し、井戸SK-03を検出した。第4層も基本的には第3層



第3回 第4次調査地点トレンチ配置図

と同様、弥生土器、須恵器、土師器を多量に含んだ搅乱土である。これより下層は明黄褐色粘質土を基調とする地山となり、この上面に溝、ピット等の各種遺構を検出した。明確に遺構に伴う遺物は出土しなかったが、第3・4層出土の遺物から遺構の大半は古墳時代後期に属するものと推定される。ただし各遺構の深度は概して浅いため、整地の際に上部がある程度削平を受けたものと考えられる。この整地の時期は概ね7世紀代と推定される。



第4図 第1-2トレンチ平面図

古墳時代後期に属するものと推定される遺構として、溝3、小ピット2、大小の不整形土塙8がある。SD-01は幅1.04m、深さ0.4mで断面U字状をなし、走向方位はほぼN-45°-Wである。埋土は2層に大別されるが、上層の搅乱土を除くと、下層からは遺物はほとんど出土しなかった。SD-02は深さ約20cmを測る。ただし北側の肩しか検出しなかったため幅については不明である。埋土は第4層と同様、各時期の遺物を含む搅乱土である。その他、各ピット、各土塙はいずれも深度が浅く、遺構に伴う良好な遺物にも恵まれなかった。さらに調査面積も極めて限られたものであったことなどから、これら各遺構の性格については現時点では明確にし難い。ただ上部搅乱土中出土の遺物は、少量の弥生土器を除くと大半が須恵器であり、多くが古墳時代後期の一定期間に属するもので占められることなどから、上記各遺構の時期をある程度示唆するものと考えられる。

近世の遺構として井戸SK-03がある。平面は円形状を呈し、掘り方上面の規模は東西2.4m、南北2.1mを測る。大きく2段に掘り込まれ、

上部はすり鉢状、下部は円筒状を呈する。石組は径10~20cmの大角礫を積み上げたもので、東側はかなり崩れていたが、西側は比較的良好に遺存していた。完掘しなかったため内部の規模は明らかにし難いが、およそ直径60cm、深さ70cm以上を測るものと推定される。埋土からは擾乱を受けたと見られる須恵器片が多数出土し、それに混じって石組上面より磁器碗の破片1点(第7図12)が出土している。

### 第3、4トレンチ

両トレンチとも、基本層序は第1~2トレンチと同様、概ね4層からなる。第3層上面および地山上面のいずれにも、明確な造構は認められなかった。遺物は大半が第3・4層から出土し、弥生土器、須恵器、土器の破片多数がある。このうち第4トレンチ第3層において、上記各遺物に混じり、円筒埴輪の破片1点が含まれていた。

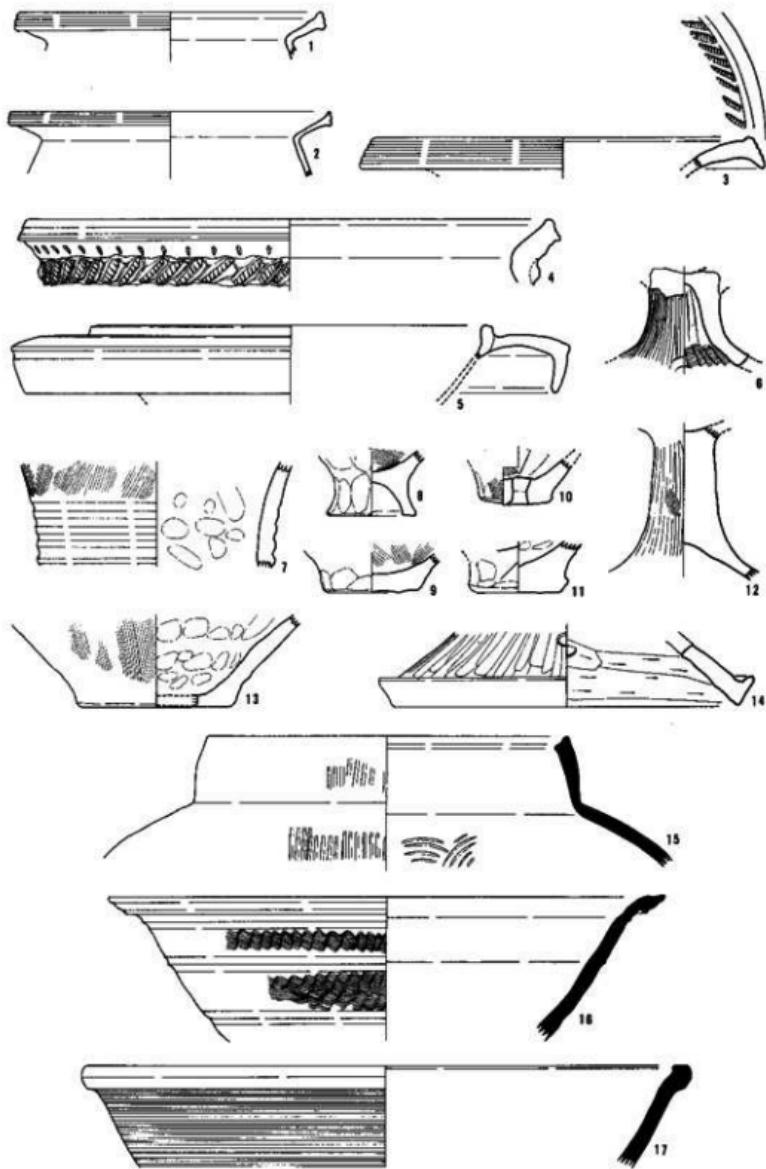
## 2 出土遺物

ここでとりあげる遺物は、大半が第1~2トレンチ第3・4層の擾乱土より出土したものである。その他、SK-05埋土内、井戸石組上面、第4トレンチ第3層出土のものについても述べる。

**弥生土器**(第5図1~14) 裹、壺、高杯、器台の各破片がある。1、2は壺の口縁部で、それぞれ口径16.8cm、16.0cmを測る。いずれも口縁端部を若干つまみ上げぎみに引きのばし、端面には2条の凹線を走らせる。3は壺の口縁部で、口径19.6cm。端面に4本の凹線、端部内面には列点文を施している。4は壺の口縁部で、口径27.2cmを測る。「く」の字状に短く外反し、外面にはヘラによる刺突文、その直下にハケ状工具による押圧を加えた突帯を施している。5は高杯の杯部で、口径20.0cm。口縁部は水平にのび、端面は幅広く垂下する。また端面上部には一条の凹線を施している。6は高杯の脚部で、脚部は大きく広がり、4方にスカシ孔を有する。外面はヘラ磨き、内面は断続的なハケによる調整が施され、上部にはシボリ痕が残る。7は器台の胴部と推定される。外面に4条以上の凹線が施され、上部はハケ調整である。8は脚台部で、底径4.6cm。外面は指頭調整、体部内面はハケ調整が施される。9~11、13はいずれも底部破片である。10は外面をハケ、内面をハケのちナデにより仕上げられ、底部に焼成前の穿孔が施される。なお、6・10はSK-05埋土内出土のものである。13は底径8cmを測り、外面にハケ、内面ナデにより調整している。12は高杯の脚部で、中央のやや長い脚柱部を有し、外面ハケのちヘラ磨きの痕跡を残す。14も高杯の脚部で底径18.0cmを測る。脚部は大きく広がり、端部は強く上方につまみあげ、幅広のやや凹んだ端面をなしている。スカシ孔が施されるが、破片のため方向は不明である。外面は粗いヘラ磨き、内面は横方向のシャープなヘラ削りが施される。

**須恵器**(第5図15~17、第6図 第7図1~10)

**蓋杯**(第6図1~19) 杯蓋は大半が口径11.4cmから13cm前後におさまるが、1のように口



第5図 第4次調査地点 出土遺物実測図

径17.0cmを測る大型のものもある。天井部と口縁部を界する稜は、いずれも比較的シャープに仕上げられている。また口縁端部内面の段も顕著で、明らかに凹線をなすものもある。ただし8のみは稜、段ともに認められず、全体として純い感を与えるものである。一方、杯身には、立ち上がりを有するもの、立ち上がりを有しないもの、およびそれに高台を付したものがある。立ち上がりを有するものは、口径11.4cmから15.5cmとやや幅をもち、各部の形状、成形等に差異が認められ、若干の時期差を示すものと見られる。また立ち上がりを有しないものは、その形態から明らかに数型式ドるものである。なお14の底部には三角形のヘラ記号が施されている。

**高杯**（第6図20・21、24～26、第7図1～4）いずれも破片で全体の形状を捉えにくいが、それらの特徴から有蓋、無蓋、および長脚、短脚のものに分けることができる。第6図20・21は有蓋高杯のつまみの破片である。有蓋短脚高杯の脚部はスカシ孔の方向に3方と4方の二種があり、脚端部の形状にも差異が認められる。また長脚のものではスカシ孔を有するものと有しないものがある。そのうち第7図4は生焼けの状態を示す。なお1点のみ無蓋高杯の杯部の破片があり、体部に密な波状文が施される。

**甌**（第7図5） 頭部から口縁部にかけての破片である。口径11.5cm。内面は大きく段をなし、口縁端部内面にはナデによる深い凹線が走る。また頭部外面には密な波状文が施される。

**提瓶**（第7図8） 口縁部を欠くが、爾平等な円球状の体部を有する。外面をカキ目、内面はユビナデにより調整され、肩部には把手の名残りと見られる円形浮文が付されている。

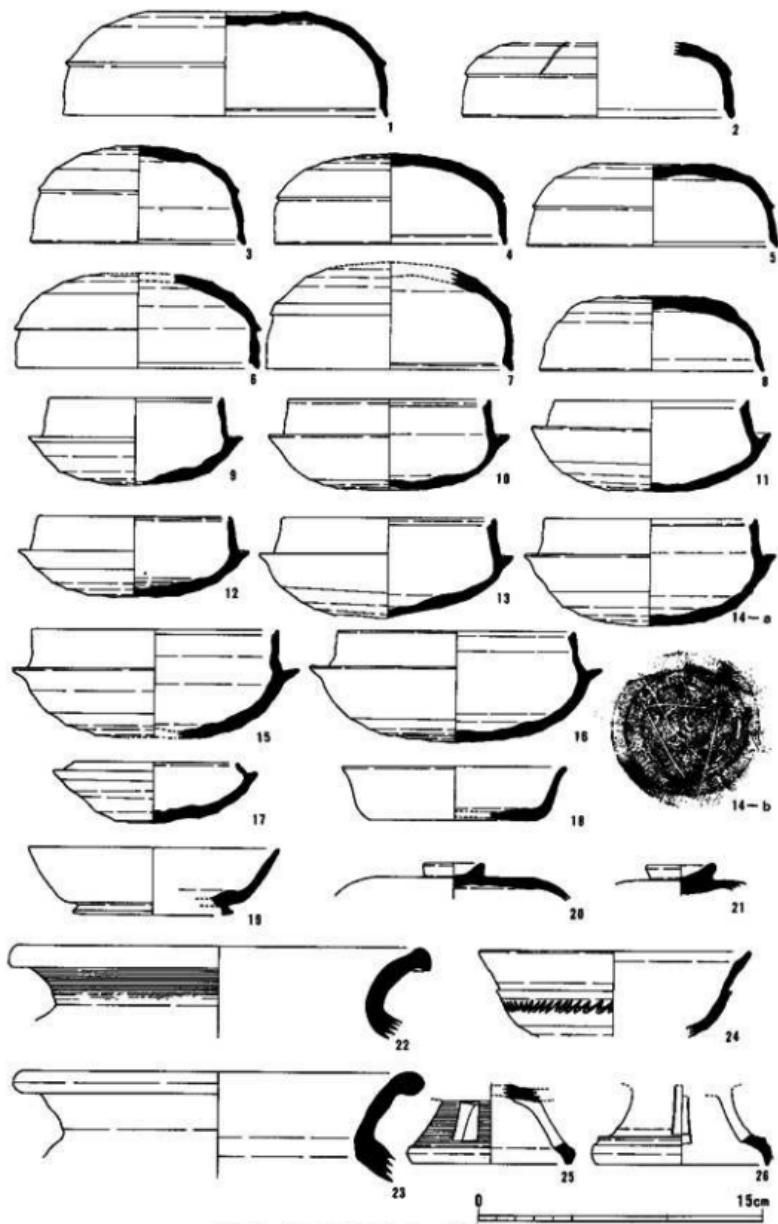
**短頸壺**（第7図10） 口径9.8cm。頭部は短く直立し、肩部の張りはゆるやかで、底部はやや平坦につくられる。肩部外面にカキ目が施される。

**器台**（第5図16、17） 16は口径26.4cmを測り、大きく開く体部より口縁部がやや外反する。体部外面には鈍い凸線、および凹線が施され、その間を密な波状文で埋める。17は口径31cmを測り、体部外面には一面にカキ目が施される。

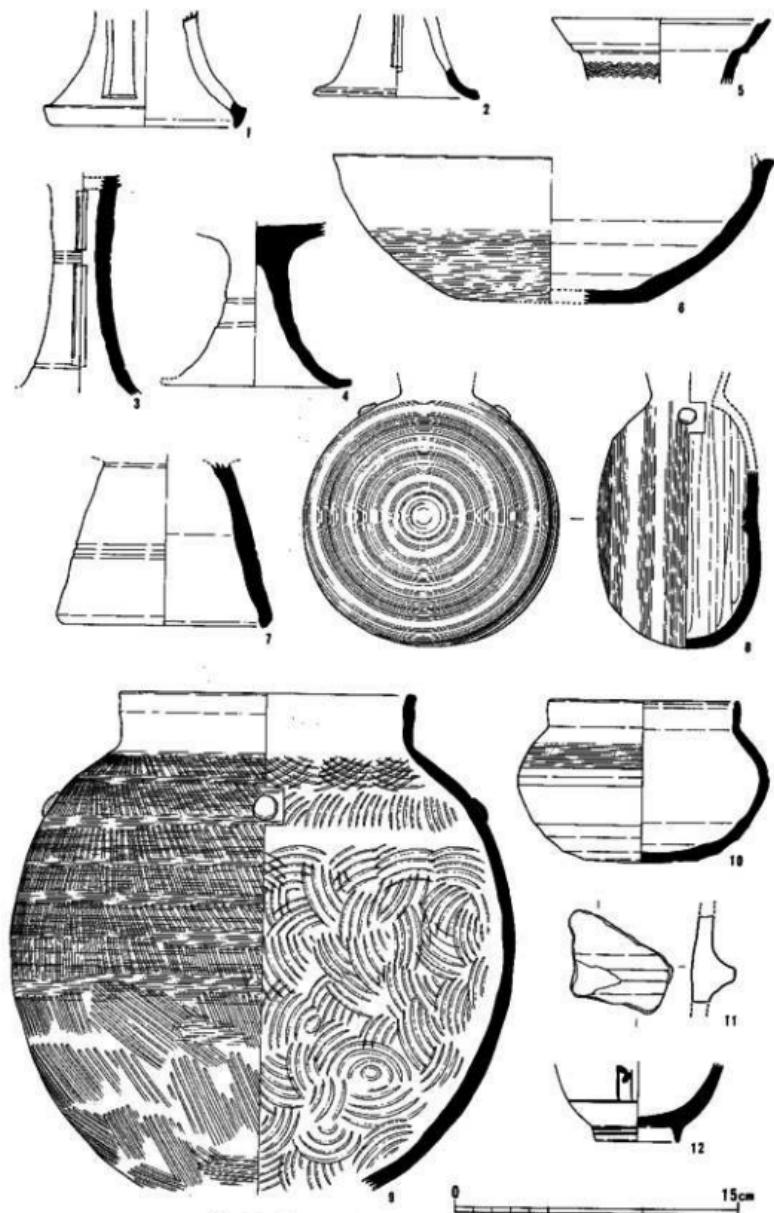
**甌**（第5図15、第6図22、23、第7図9） 口縁部の形態にもとづいて、「く」の字状に外反するもの、直立あるいは内傾する短い口縁部を有するものの二種に分けることができる。前者（第6図22、23）はともに口径21cm前後を測り、口縁端部を丸く肥厚させ、23の口縁部外面にはカキ目が施される。後者のうち第7図9は口径15.2cmを測る。肩部の4方向に円形浮文が付され、外面は平行タタキのちカキ目、内面は同心円のタタキが施される。

以上その他 全形は判明しないが受部径23.2cmの鉢形を呈するもの（第7図6）がある。丸い体部に平底を有し、体部外面にはカキ目が施される。口縁部付近の形状は杯身の口縁部に類似し、受部状の張り出し、および立ち上がり部の欠損と見られる剥離面が認められる。また上部の形態は明らかでないが脚台部（第7図7）がある。底径10.5cmを測り、内外とも回転ナデ調整が施される。

**その他の遺物** 円筒埴輪の破片1点（第7図11）が第4トレンチ第3層から出土している。内外面とも磨滅のため調整は明らかではないが、断面台形の比較的しっかりとした突帯を有す



第6図 第4次調査地点 出土遺物実測図



第7図 第4次調査地点 出土遺物実測図

る。また磁器碗（第7図12）は第1・2トレンチ井戸石組上面より出土した。底径4.3cmを測り、外面には呂須による圓線および草花文と見られる文様が施される。

以上のように、第4次調査地点の出土遺物は大半が第3・4層より出土し、明らかに二次的に攪乱を受けたものである。それらの特徴についてまとめるならば、弥生土器はいずれも中期ないし後期に属し、第2次調査地点の出土遺物と合わせ、当該地域における弥生集落の存在を窺わせるものである。<sup>註1</sup>また出土遺物の大半を占める須恵器は、報告にとりあげたもの、およびその他の破片の中にかなりの高率で生焼けの状態を示すものが含まれる点が注目される。これについては同年12月に調査を実施した本町遺跡において、出土須恵器の中に多量の焼け歪み、生焼けを示す製品が含まれ、当調査地点との位置的な近接性をも絡め、両者の関連に興味がもたれるところである。<sup>註2</sup>なお、今回出土した須恵器の多くは、当調査地点周辺に位置づけられる桜井谷窯跡群編年試案によるI型式第3段階ないしII型式第2段階に属し、当調査地点を含む、占墳時代集落の中心をなす時期の1点を窺うことができよう。

註1 「新免遺跡『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1982年度 1983年3月 豊中市教育委員会

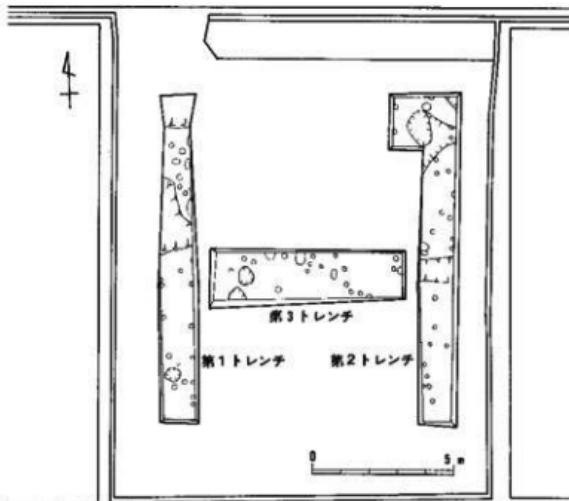
註2 木下旦「相津桜井谷窯跡群における須恵器編年」『桜井谷窯跡群2-17窯跡』1982年12月 少跡窯跡調査団

## 第6次調査地点

第6次調査地点は豊中市玉井町3丁目22番地にある。当地点は台地の北側縁辺部、標高約21mに位置している。北側に進むに従って緩やかに傾斜し、谷間を流れる千里川へと移行する。調査範囲内にトレンチを日字形に設定し、行なった。

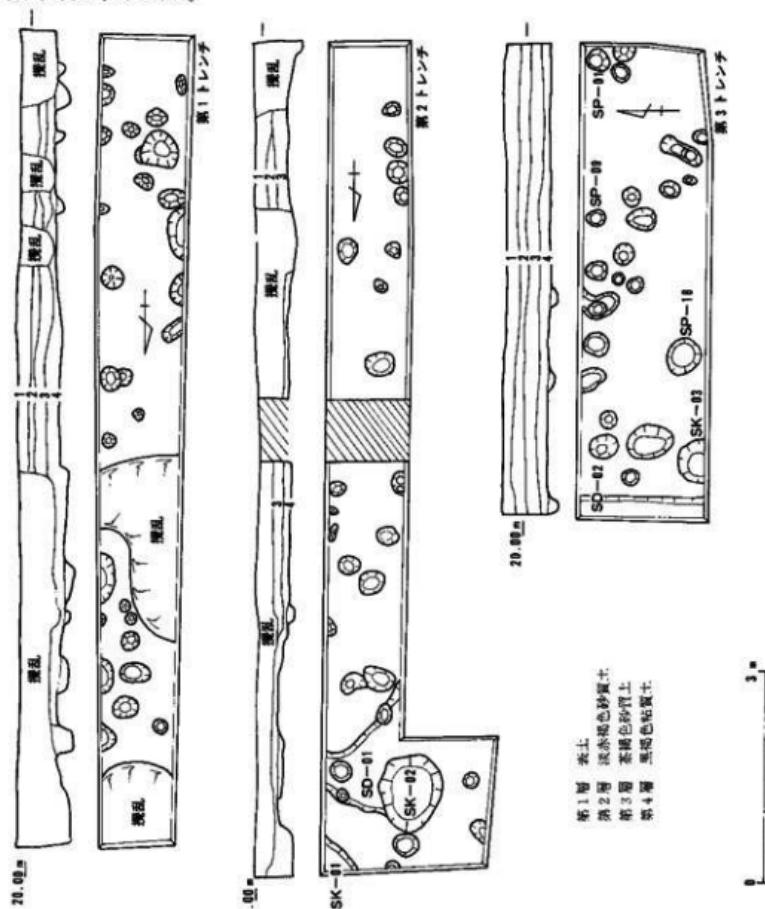
### 1 各トレンチの概要

第1トレンチ 約開の西側に長さ11.5m、幅1.5mのトレンチを南北に設定した。土層は基本的に4層に大別される。第1層は表土

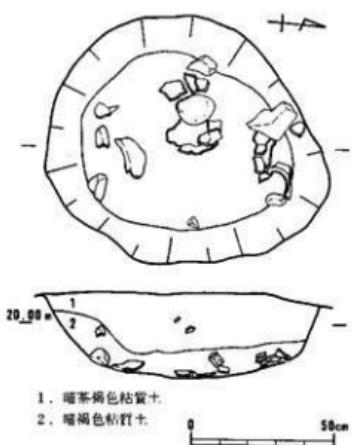


第6図 第6次調査地点トレンチ配置図

層であるが、幾度かの建替えが行なわれ、整地されており、各時期の遺物を含む擾乱層である。また中央から北側に擾乱塗があり、造構面も破壊されている。第2層も焼土を含む整地層である。第3層は各時期の遺物を含む砂質土であるが、特に中・近世の遺物を多く含んでいる。第4層は黒褐色の粘質土で、弥生土器、土師器、須恵器を含む包含層である。この上面で、若干の溝状造構が存在する。第5層は、黄褐色を呈し、礫混りの部分と粘土からなる地山である。この上面でビットを検出したが時期の判別は定かにしがたい。またトレンチ幅が狭いため、建物の配置も不明である。



第9図 第1・2・3トレンチ平面図・断面図



第10図 SK-02平面図・断面図

層に分層される。土器は布留式土器の新しいものと若干の製塙土器が出土している。

溝状遺構は土塹に切れられ、不定形で深さもなく、土塹の西側付近で自然消滅する。時期は弥生時代中期と推定される。

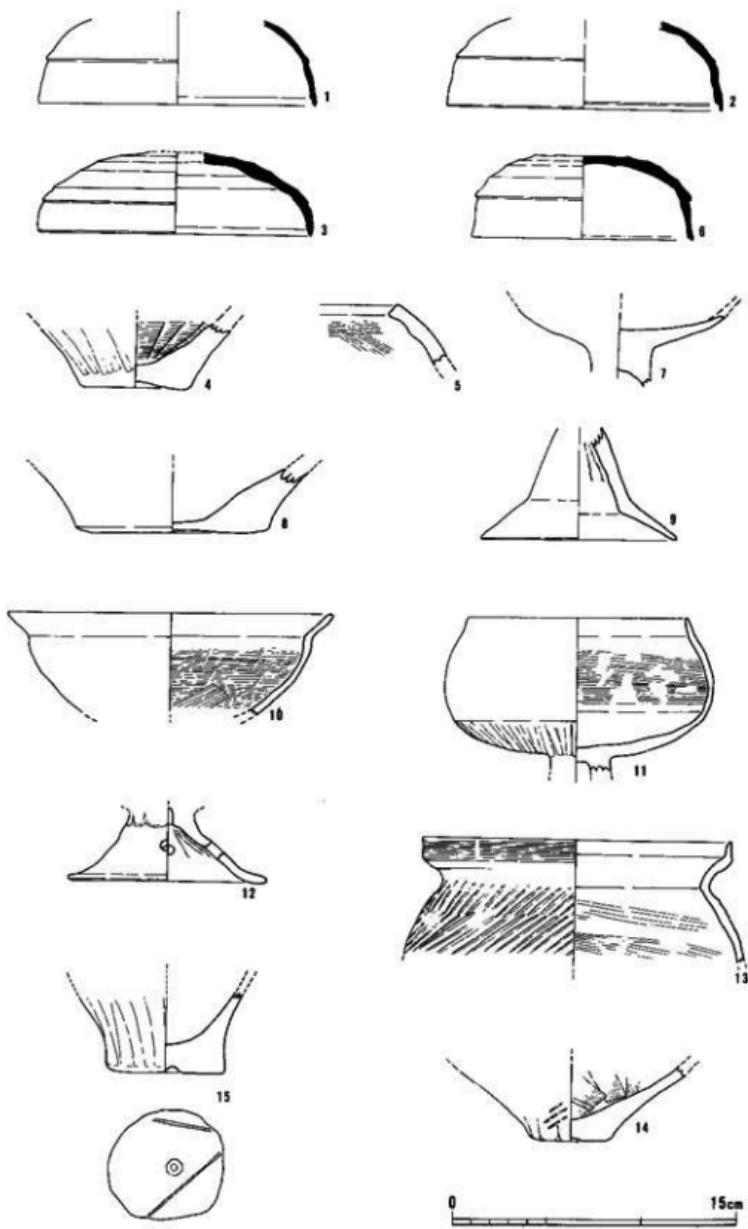
**第3トレンチ** 第1トレンチと第2トレンチの間、ほぼ中央に長さ7m、幅2mのトレンチを東西に設定した。層序は第1トレンチとはほぼ同様である。検出した遺構は第4層上面からの溝、第5層上面（地山）からのピットである。ピットの中には弥生時代後期の土器を伴っているものもあるが、多くは古墳時代のものと推定される。

## 2 出土遺物

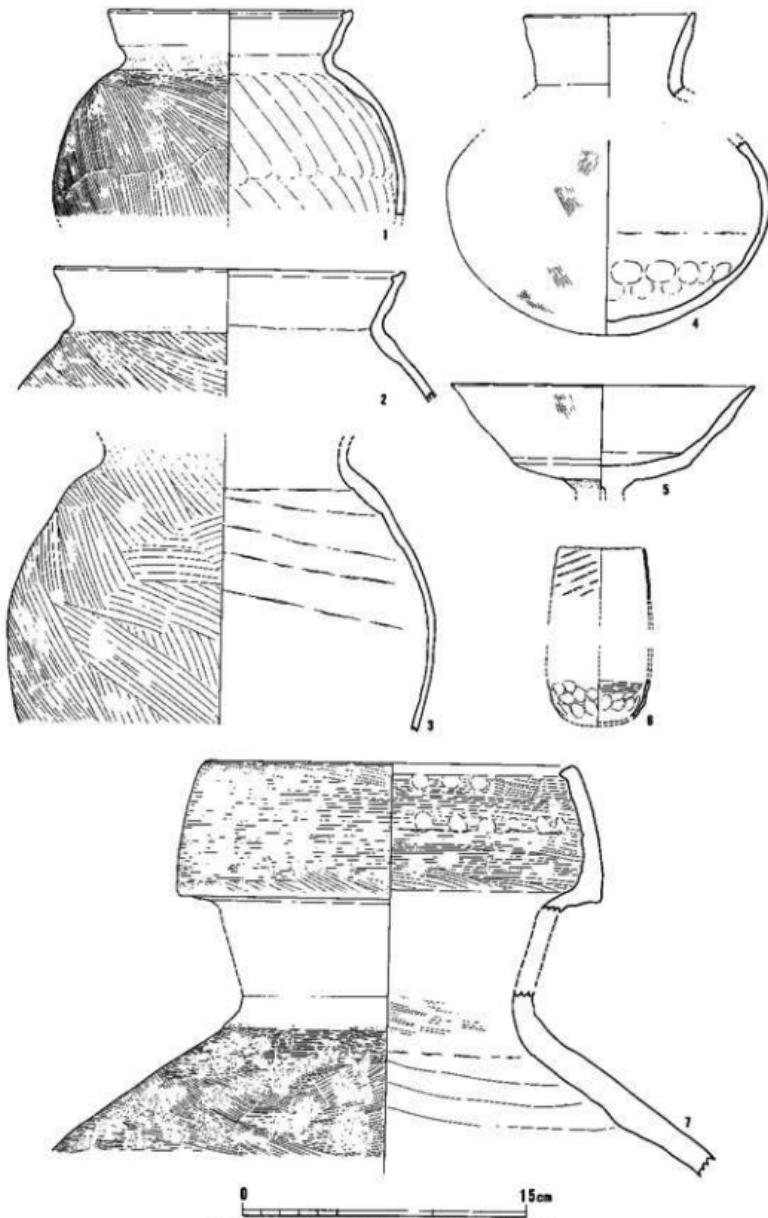
遺物は、溝、土塹、ピット及び包含層から出土している。種別は弥生土器、土師器、須恵器、模式系土器、製塙土器、石器である。以下、土器と石器に分け報告する。

### 土器

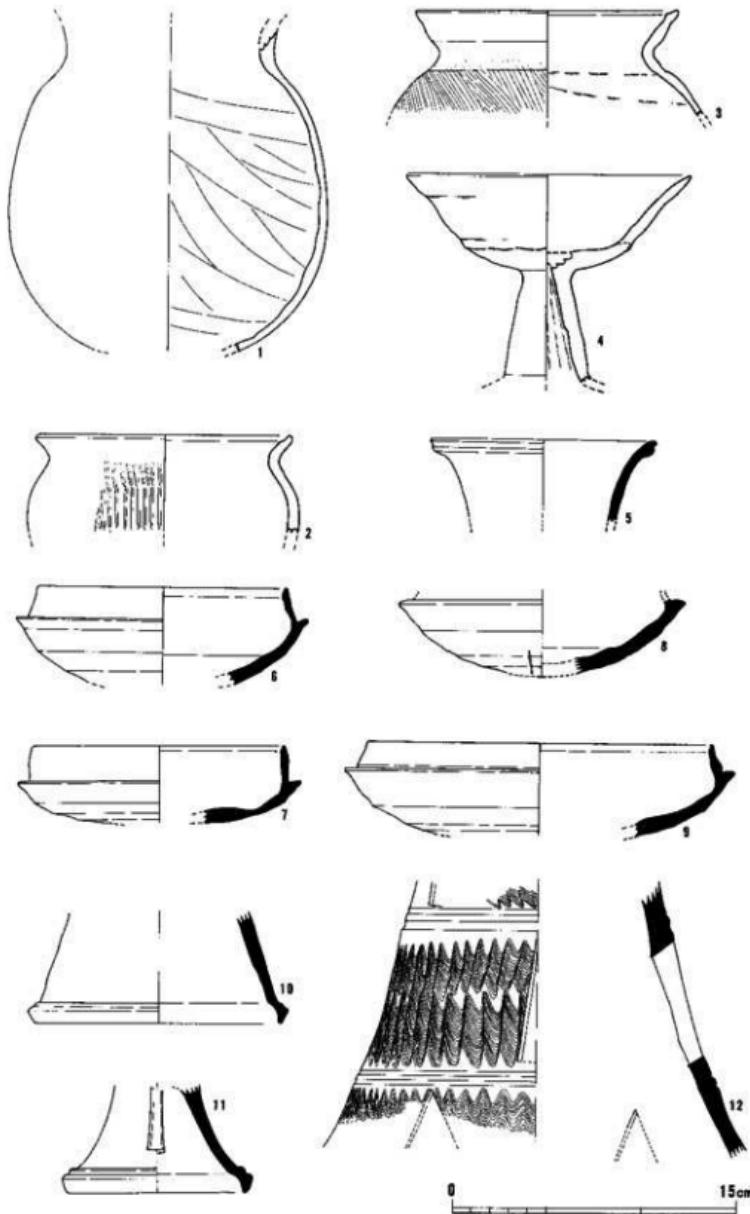
**SP-18** (第11図10~14) 弥生時代後期の土器で占められる。鉢10は底部を欠損するが、平底になるものと思われる。外面はナデ、内面は横方向のハケによって調整されている。台付鉢11は台部を欠損する。外面は縦方向のヘラ磨き、内面は横方向のハケで調整されている。12は高杯の脚部で、四方に円形の穿孔がある。内外面ともナデ調整であり、内面に絞り痕が認められる。號13は外反する口縁部が角度を変えて立ち上がり、受口状を呈するものである。外面は右上がりのタタキが施され、内面は横方向のハケで調整されている。14は底部であるが、器種は明言し難い。外面は右上がりのタタキの後、ナデによって調整されており、内面は左上がりのハケが施されている。



第11図 第6次調査地点 出土遺物実測図



第12図 第6次調査地点 出土遺物実測図



第13図 第6次調査地点 出土遺物実測図

**SD-1** (第11図8、9) 弥生時代後期の高杯脚部が出土している。両者とも磨滅のため、外面の調整は不明であるが、9の内面には僅かに絞り痕が認められる。

**SK-2** (第12図、第13図1) 布留式新相を呈する土器群で占められる。表は、口縁部が頸部から屈曲して緩やかに外反するもの（第12図1、2）と、頸部から緩やかに外反するもの（第12図3、第13図-1）の2種類がある。前者は何れも口縁部が内傾して肥厚しており、外面は粗いハケ、内面はナデ調整である。後者は2個体とも口縁部を欠損しており、端部の様相は不明である。3も外面は粗いハケで内面はナデであるが、第12図1は外面と内面ともナデで、非常に粗雑な作りである。4は直口壺である。外面は縦方向のハケメ、内面はナデで調整されている。5は、上外方へ直線的に伸びる口縁部を有する高杯の杯部である。外面は横方向のハケメであるが、内面は磨滅のため調整不明である。6の製塙土器は器壁が2mmと非常に薄く、外面は火熱を受け、淡灰白色を呈する。外面にはタタキが施され、内面はナデ及び板ナデで調整されている。7は西部瀬戸内系の複合口縁壺で、胎土には金雲母が含まれている。外面は口縁部及び体部とも横方向のハケメ、内面は口縁部がハケメで体部はハケとナデで調整されている。

#### その他の造構（第11図1～5・15）

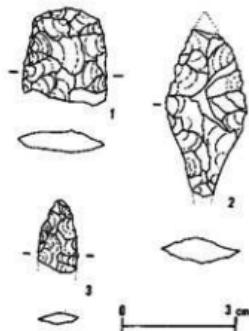
**SP-1** (1、2)、**SP-9** (3) では須恵器の杯蓋と十師器の高杯が出土している。また、**SK-7** では弥生時代中期の生駒西麓産と思われる無頭壺と後期の底部、**SP-11** では弥生時代中期の底部が出土している。

#### 包含層の土器（第13図2～12）

包含層からは弥生土器、土師器、須恵器、漢式土器が出土している。2の漢式土器は底部を欠損しているが、恐らく平底の深鉢になるものと思われる。外面には縦方向のタタキが施され、内面は回転のナデ調整である。

#### 石器（第14図1～3）

**SP-18** (1)、**SD-01** (2)、包含層 (3) より出土しており、素材は何れもサヌカイトである。1は両面を押圧剥離によって調整されたもので、端部は丸く終っている。2は柳葉形式の石鎌で、両端は欠損している。縁辺には押圧剥離による細かい調整が行なわれている。3も石鎌で、先端のみ残存している。縁辺には押圧剥離による細かい調整が行なわれている。



第14図 石器実測図

## 第7次調査地点

第7次調査地点は豊中市末広町1丁目100番地にあたる。当地点は台地の中央部、標高約23mに位置する。範囲内にトレンチをL字型に設定して行なった。

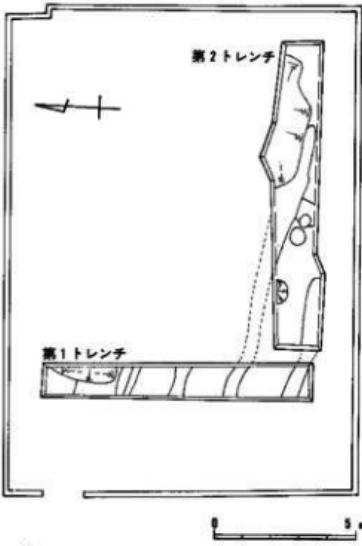
### 1 各トレンチの概要

**第1トレンチ** 敷地の西側に長さ9.5m、幅1.3mのトレンチを南北に設定した。土層は基本的に4層に大別される。各層より各時代の遺物が出土している。地山面まで表土下約0.7mである。

遺構は、北西方向から南東方向に走る溝を5条検出した。SD-01は第3層上面で検出したもので、幅約1.5m、深さ0.3mである。須恵器片がわずか出土しているが、層位より近世以降の時期と推定される。SD-02は第4層上面で検出したもので、幅0.3m、深さ0.2mである。遺物は土師質土器、須恵器、磁器が出土している。近世の時期であろう。

SD-03、SD-04、SD-05は第5層（地山）上面で検出されたもので、幅約0.5m前後、深さ0.2m弱である。SD-05より瓦質土器が出土した。中世の時期と推定される。

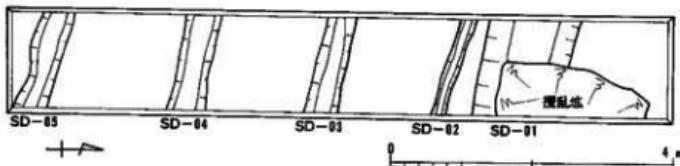
**第2トレンチ** 敷地の南側に長さ10m、幅2mのトレンチを東西に設定した。層序は第1トレンチと同様であり、第1トレンチのSD



第15図 第7次調査地点トレンチ配置図



1. 濁乱層 3. 灰色砂質土層 5. 暗褐色砂質土層 7. 暗灰褐色砂質土層 9. 淡灰褐色砂質土層  
2. 黒色土層 4. 明黄灰色粘質土層 6. 底黄茶色砂質土層 8. 灰褐色砂質土層 10. 暗黄褐色粘質土層



第16図 第1トレンチ平面図・断面図

-04と連続すると思われる溝を検出したのである。この溝も東側で自然消滅する。

出土遺物は細片で図化しえるものは1点もない。

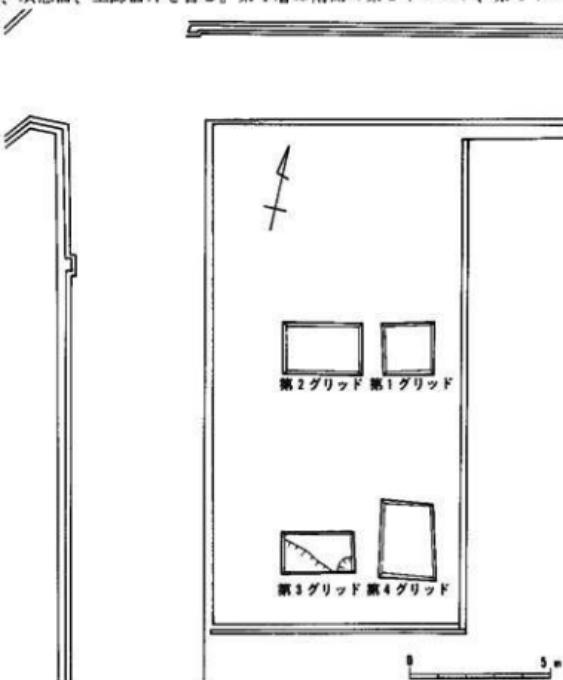
## 第8次調査地点

第8次調査地点は農中市末広町1丁目107番地にあたり、第7次調査地点の北方約20mである。住宅建築工事の関係から時間がそれほどとられず、また造構面が建物の基礎より深いため、基礎をさけてトレンチ調査を実施した。グリッドは2m×3m内外のものを4個所設定した。

### 1 各トレンチの概要

各グリッドの層序は基本的に同じであり、4層に大別される。北側の第1トレンチ、第2トレンチでは包含層が全体的に薄く、また削除されている部分もある。南側の第3トレンチ、第4トレンチでは、地形が若干南に傾斜しているため、包含層が10cm～15cmの厚さで残存している。第1層は表土で盛り土されている。第2層は旧表土で陶磁器、須恵器、土師器を含んでいる。第3層は床土で瓦器、須恵器、土師器片を含む。第4層は南側の第3トレンチ、第4トレンチでは上下に分層され、出土遺物に差はない。瓦器、須恵器、土師器などが含まれている。上層が薄く、下層が深い暗茶褐色粘質土である。

検出した造構は第5層（地山）上面において、第1トレンチで耕作状の小溝と第3グリッドの溝状造構である。溝状造構は北西方向から南東方向に走るもので、北側半分のみを検出した。南側は未調査地にのびるためはっきりしないが、検出した状況から溝になるものと考えられる。溝幅2



第17図 第8次調査地点トレンチ配置図

m以上、深さ0.5mで第19  
図の須恵器、土師器が底面  
上で出土している

## 2 出土遺物

遺物は概ね包含層、及び  
第3トレンチ溝状造構内か  
ら出土している。包含層中  
のものは細片であり、図示  
し得るものはほとんどない。  
したがって報告は、溝状造  
構内から出土したものに限  
る。出土状態も埋土最下層  
の底面上で埋まっている。

須恵器（第19図）

蓋杯（1・3～11） 杯  
蓋（1・3・4）は口径が

16cm程度の大型である。口

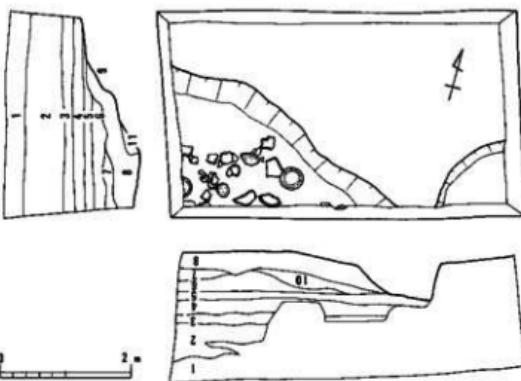
縁端部は段を有しているが丸味を帯びる。また凹面をなすものもある。天井部と口縁部を界す  
る後線は丸味を帯び、鈍く、突出度も弱い。口縁部は緩く内傾するものと端部で緩やかに外反  
するものがある。天井部は扁平気味のものと、若干高く丸味をもつものがある。天井部の約～  
1/3程度が回転ヘラ削りされている。3は焼成が悪く、生焼けである。

杯身（5～11）は、口径が15～16cmのものと13cm弱のもの（10）1点がある。口縁部立ち上  
がりの内傾度が強いものがある。端部は段を有し、凹面をなすが、全体的に丸味を帯びている。  
受部は外方に薄く突出するものと器壁が厚く、丸味を帯びるものがある。底部は扁平気味な  
ものと丸味を有するものがある。全体の1/3～1/4程度が回転ヘラ削りされている。7と11は生焼  
けで、5は焼成歪んでいる。

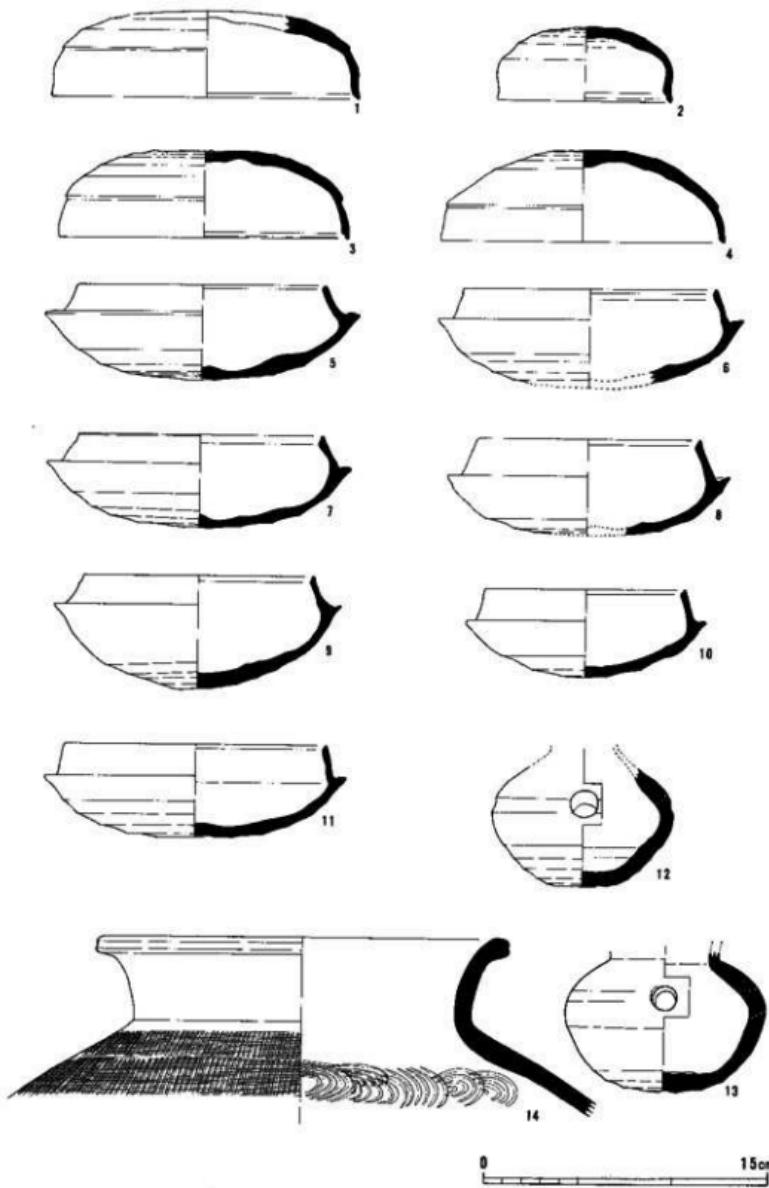
蓋（2） 口径9cm強で、下方にのびる口縁は端部で緩く外反する。端部は内傾する段を有  
するが丸味を帯びている。天井部はやや高く、回転ヘラ削りが全体の1/3程度行なわれている。

甌（12・13） 体部のみ残存する。12は最大径9.7cm。体部はやや扁平気味で、体部の中央  
からやや上に、上外方から内方へ斜めに穿孔されている。この位置に一筋の浅い太めの凹線を  
施す。脚部下半まで回転ヘラ削り。13は最大径10.6cm、球形な体部で、中央からやや上に穿孔  
を有する。底部付近回転ヘラ削り。

甌（14） 口径21.8cm、緩く外反する頭部から口縁端部で若干肥厚し、水平気味に開く。端



第18図 第3トレンチ平面図・断面図



第19図 第8次調査地点 出土遺物実測図

部外面に凹線を施す。肩部外面は平行タタキ、その上をカキ目調整、内面は青海波文を残す。

#### 土師器（第20図）

甕（1～3） 1は小形の甕である。口縁部が緩く外反し、端部は薄く尖って終る。外面はタテ方向のハケ調整、内面はナテ調整で指頭圧痕を残す。胴部下半を欠損する。2は大形甕である。口縁部がきつく外反し、端部は突出気味に内傾し、丸く終る。外面はタテ方向のハケ調整、内面はタテ方向のナテ調整で指頭圧痕を残す。口縁部は内外面ともヨコナナテ調整。3は長胴甕の胴部である。内外面ともタテ方向の粗いハケ調整である。

これらの遺物は、溝から出土したものの中から一括性の高いものである。須恵器は桜井谷窯跡群編年試案のII式型1段階～2段階のものである。個々においては若干の型式差がみ

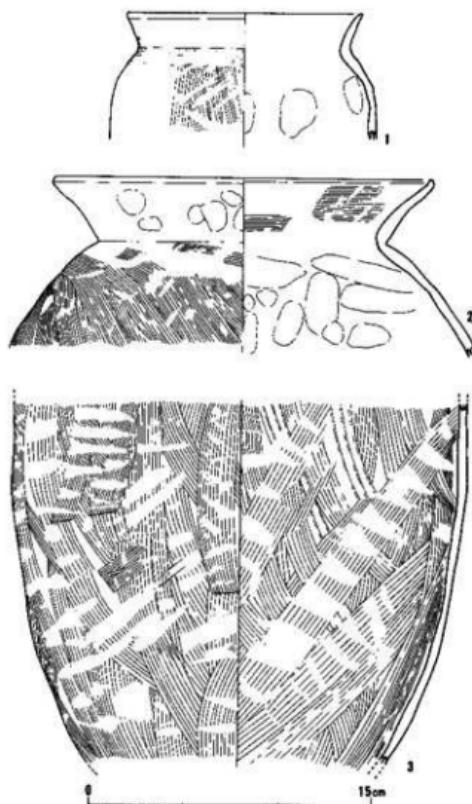
られるものの、集落遺跡における出土状態の一端を示す資料であろう。また、この時期の土師器の様相が不鮮明な中で、器種が限定されたもの、共伴の資料が得られたことは成果である。

### 第9次調査地点

第9次調査地点は、豊中市玉井町2丁目181番地にあたる。

調査は敷地中央部の東西に、長さ8m、幅2.5mの第1トレンチを、南北に長さ7m、幅2mの第2トレンチを、第1トレンチの南側にT字形に設定し、実施した。なお、遺構の広がる所は若干の拡張を行なった。

#### 1 各トレンチの概要



第20図 第8次調査地点 出土遺物実測図

本調査地の基層は、第1・2トレンチとも、第1層擾乱、第2層（淡茶灰色砂質土）、第3層包含層（暗茶褐色粘質土）、第4肩地山（暗茶黄色粘質土）に大別される。第3層は、古墳時代の遺物包含層であるが、殆んど削平を受けしており、ところどころに堆積を残すのみである。第4層（地山）は、第2トレンチの南側で茶褐色硬層に変わっている。

#### 第1トレンチ

検出した遺構は

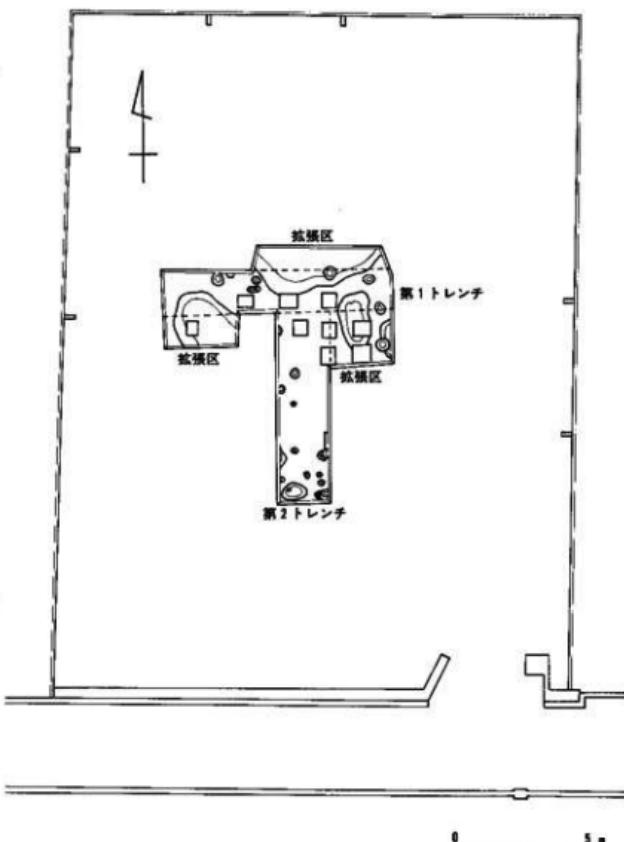
2層上面で幅75

cm、深さ15cmの南北に並走する3条の近世溝と、4層上面（地山面）のピット、土塙である。

ピットは円形で径30cm～40cm、深さ10cm～40cm程度のもので、SP-7と9は土塙の埋没後に作られており、各ピットからは須恵器、土師器が出土している。

土塙は4基検出された。SK-1はかなり大きく、なだらかな傾斜で北側に延びており、須恵器、土師器が出土した。SK-2は南東方向に延びるようであり、深さは80cmを測る。出土遺物は数片の須恵器と弥生土器、甕の他は、土師器の高杯や甕が大半を占めている。SK-3・4も少量ではあるが須恵器、土師器が出土している。

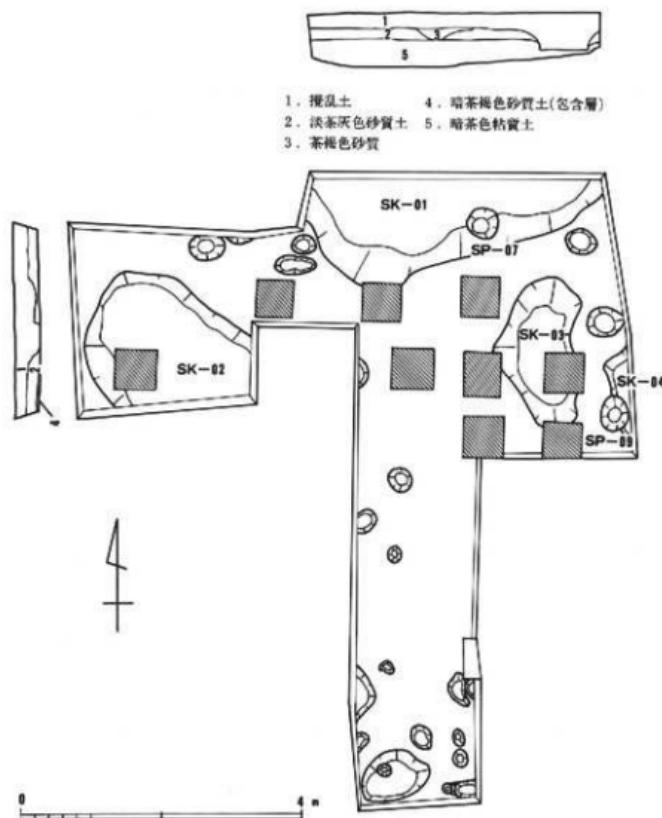
これらの土塙は、調査区外へ延びるため規模・性格等を掲むまでには至らなかった。



第21図 第9次調査地点 トレンチ配置図

**第2トレンチ** 検出した遺構は4層上面（地表面）でのピットだけである。トレンチ北側のピットは、径15cm～30cmで円形をなし、深さは10cm～18cm程度のもので、暗茶色粘質土の埋土より須恵器、土師器の遺物が出土している。南側の茶褐色礫層より切りこまれたピットは、総じて不定形で5cm～10cmと浅く、遺物は出土していないが、埋土の色調が北側のピットと同じであり、時期差はないものと推測される。

今回の調査は面積が狭いことにより遺構の広がりや、遺跡の性格を把握することができなかった。しかし古墳時代後期の須恵器や土師器の出土と、ピット・土塁の検出により、古墳時代後期の集落であったことが窺える。



第22図 第9次調査地点平面図・断面図

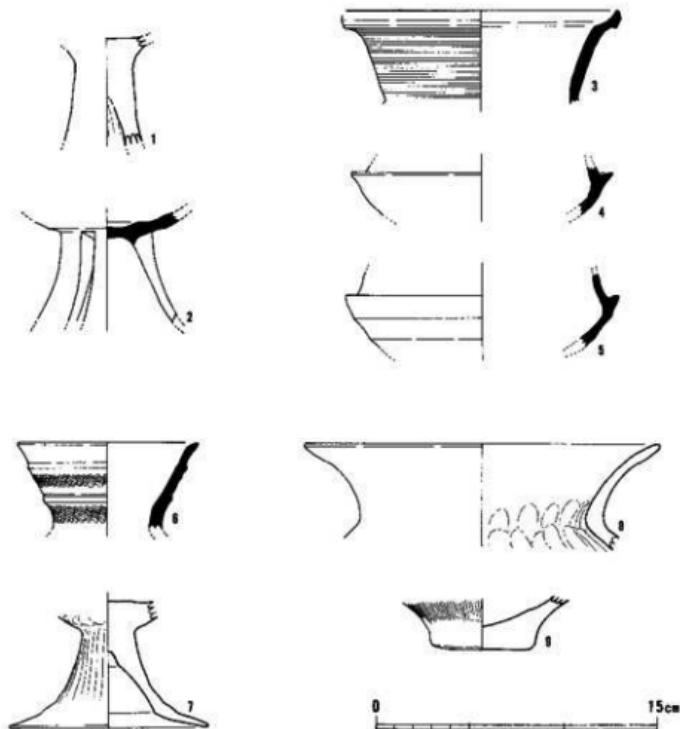
## 2 出土遺物

遺物はピット、土塙、及び第2、3層（包含層）から須恵器、土師器、弥生土器、石錐が出士している。以下、土器と石器に分け、報告する。

### 土器（第23図）

第23図に示した土器類は第1トレンチのSK-01とSK-02から出土した須恵器、土師器、弥生土器である。

SK-01（1～5） 1は土師器の高杯脚部であるが、磨滅が激しいため、脚部内面のしばり痕が残る他は不明である。2は須恵器の高杯で、脚部の外面と杯部の内面はヨコナデ調整、外面はヘラ削りを行ない、三方に長方形のスカシ窓を有する。3は須恵器の壺形土器の口縁で、内面から口縁端部外面にかけてはヨコナデ調整、外面はカキ目調整を行なっている。4は杯身で、受部はやや上方にのび、立ち上がりは内傾する。ヨコナデ調整が内面に認められるが、外



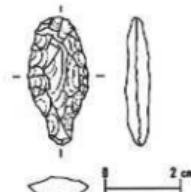
第23図 第9次調査地点出土遺物実測図

面は磨滅が激しく不明である。5も杯身で受部は太く端部は丸く終わり、立ち上がりは外反気味に内傾する。受部には接合痕が認められる。内外面ともヨコナナデ調整後、外面はヘラ削りを行なっている。

S K-02 (6~9) 6は須恵器の直口壺で、頸部から口縁部はほぼ直線的に外傾し、頸部には突帯と波状文が交互に二带ずつ巡る。内外面ともヨコナナデ調整を行なっている。7は土師器の高杯脚部で、脚柱部と裾部の境は不明瞭である。脚柱部から裾部へゆるやかに移行し端部は丸く終わる。脚柱部の内面はヘラ削り、外面はヘラ磨き、裾部外面はナナデ調整を行なう。8は土師器の壺の口縁部で、口縁はやや外反気味に外傾する。内外面ともヨコナナデ調整、頸部内面はユビナナデを行なう。9は弥生土器の甕底部で、内面は磨滅が激しく不明であるが、外面はハケ調整を行なう。

#### 石器（第24図）

第24図の石鎌は第1トレンチの第3層より出土した弥生時代の凸基有茎式のものである。先端部は欠損しており、基部は錐として用いたためか磨耗している。



第24図 石器実測図



第25図 第9次調査地点第2トレンチ遺構検出状況

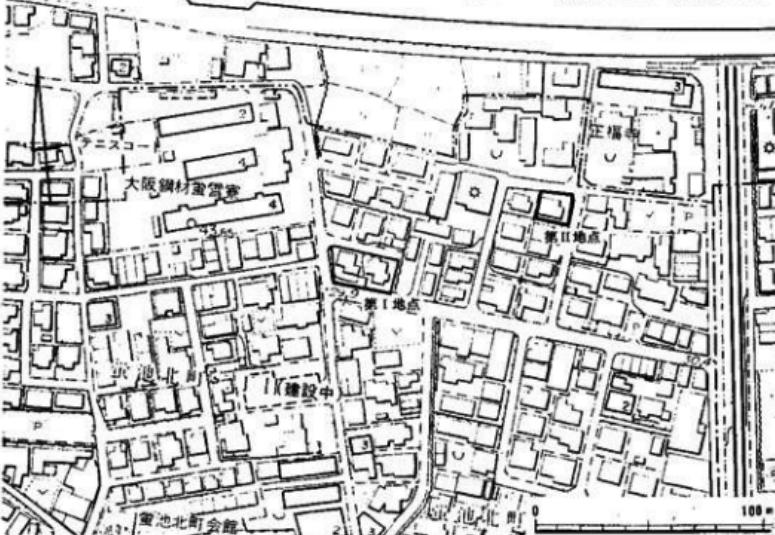
## 螢池北遺跡第2次調査地点

### I. 調査の経緯と地理的環境

調査地は豊中市螢池北町一丁目155-1番地に所在する。螢池北遺跡II地点(宮ノ前遺跡)を含めた付近一帯の洪積台地は、昭和43年に中国自動車道路建設工事に伴って確認された周知の宮ノ前遺跡が位置し、螢池北遺跡もその範囲に含まれる地域である。螢池北遺跡第2次調査地点の南西150m付近には、昭和54年度に豊中市教育委員会による発掘調査を実施した第1次調査地点が位置し、今回の調査地と近接する場所である。

今回、第2次調査地点に新規木造住宅建設工事の申請書が提出された。後日、豊中市教育委員会では、遺跡の遺存状況を把握する目的で工事主体者との協議の結果、住宅建設敷地内の80m<sup>2</sup>が調査対象面積となった。発掘調査は、昭和58年12月2日～12月13日まで実施した。

地理的な環境についてみると、池田市の境界に接し、本遺跡の立地する豊中北部地域は千里山丘陵が南西方向に派生する桜井谷、刀根山河岸段丘崖線が発達し、猪名川水系の千里川右岸流域にかけて形成している地形である。本遺跡も古猪名川によって形成された標高30mの池田宮ノ前河岸段丘面に立地し、猪名川沖積低地面までの比高差は10m前後を測り、洪積台地上に



第26図 調査地点位置図

位置している。

## II. 調査の概要

調査方法は、調査面積80m<sup>2</sup>に磁北方位で4m×4mのグリッドを設定した。北東ポイントを基準点とし、東西ラインをアラビア数字で、南北ラインはアルファベットで表示した。

### 層序

層序構成は、第1～3層までに区分できる。層序堆積は良好ではなく2次的な堆積状況を示していた。第1層(10cm)は表土層、第2層(遺物包含層15cm)は弥生時代中期～鎌倉時代にかけての遺物を混在するが希薄な層序である。第3層(黄褐色砂疊粘土)は、地山層であり、以上のような堆積状況を示していた。

### 遺構

調査区域において、遺構の残存状態は良好ではなく、現・近代による水平攢乱が生じていた。検出遺構の層位関係については認められず、第3層の地山層上面を切り込んだ13～14世紀段階に比定される溝状遺構、ピット、所属時期不明の掘立柱建物跡など重複する遺構を検出した。

### 落ち込み状遺構

掘立柱建物跡の下層面より、不規則な自然の落ち込み面を検出した。深さ25cmを測る。埋土内の遺物は、弥生中期(第III様式)の範疇に属する高杯1個体分が出土した。

### 掘立柱建物跡

2～3-B～C地区において、掘立柱建物跡の柱穴列を検出した。掘り方上面より、切り合ひ関係が認められた。柱穴の一辺75cm、深さ20cm前後を測る。柱穴列の対応関係にある柱穴は現存せず建物跡の配置、規模については不明瞭であった。柱穴内の埋土遺物は、微量の土師器、須恵器を含む。

### 溝状遺構

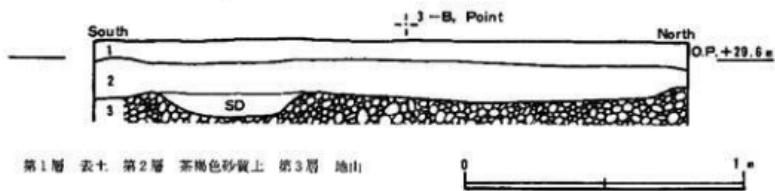
2～3-B～C地区において、東西に走行する一条の溝状遺構を検出した。溝は掘立柱建物跡の柱穴を切断している。溝幅35cm、深さ10cm前後を測り、溝内の出土遺物は、13世紀に比定される瓦器、土師器類も微量に含んでいた。

## 出土遺物

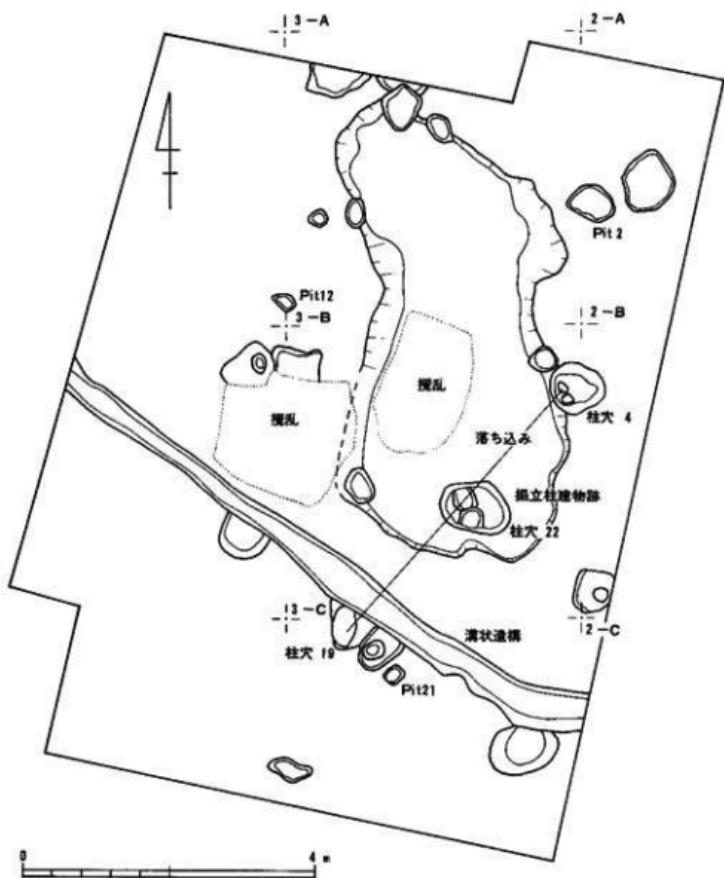
出土遺物は、殆んどが包含層から出土したもので、遺構に伴うものはあまり多くない。その中で型式的に時期が迫れる遺物だけを抽出し、報告する。

### 石器(第29図22)

石器類は、第2トレンチの遺物包含層より出土した大型蛤刃石斧1点のみで、後世の遺物と共に伴しての出土状況を示す。



第27図 層序断面実測図



第28図 第2次調査地点平面図

基端を欠失し、約3分の1が残存している。残存長6.8cm、最大幅5.6cm、最厚部3.0cmを測る。A・B両面に二次的な敲打による剥離痕が残り、特にB面は大型の剥離面を示す。基部から刃部にかけての研磨痕の方向性および使用痕（擦痕）の方向性も不明瞭である。刃部は刃済れを起こしている。石質は緑色片岩。弥生時代中期の所産と思われる。

#### 須恵器（第29図1、2）

後世の遺物と混在し、包含層より出土したものである。資料の殆んどが細片で、遺存状況も悪く、層位・共伴遺物などから時代区分を追える様な出土状況ではない。したがってここでは、型式的に時期がおさえられる杯身を示す。

1. 底部端に八の字状に外方にひらく貼付高台が内寄りにつけられ、端部はわずかに段をなし、内端部が接地するタイプである。高台周辺に自然釉が付着し、内底面に回転ナデ調整を加えている。（註1）復元高台径5.2cmを測る。陶邑の型式編年によると、Ⅲ型式第2段階に相当する。

2. 底部端には直立する形で貼付高台がつけられている。底部には回転ヘラ削り調整、他の各部については回転ナデ調整を施している。Ⅳ型式第1段階に相当する。

#### 中世の遺物（第29図3～21）

調査区において、遺物包含層、遺構内より12C中葉～16Cにかけての中世遺物が出土している。ここでは、今回の報告分の中で唯一まとまった遺物の、時間的な流れを辿る事ができる。

#### 東播系捏鉢

出土したいずれもが、体部から口縁部にかけての遺存状況である。口縁部の形状により2型式の鉢に分類できる。

#### 捏鉢A（7・8・9）

口縁部を上下につまみ出し、体部内面と口縁部端面は鋭角をなす。砂紋の混入が激しい。ヨコナデ調整される際の凹凸面が著しい。又、外面口縁部下に変色した部分があり、重ね焼き痕が観察できるのもこのタイプである。

#### 捏鉢B（3・4・5・6）

口縁端部が丸くなり、上下へのつまみ出しも殆どなくなり、体部外面と端部外面との接点を丸く仕上げる。ヨコナデ調整される際の凹凸面があまりない。

内面の調整手法に関しては2型式とも大差はないが、体部のヨコナデ調整の入念さ、胎土、（註2）焼成等に若干の違いがみられる。魚住編年を準用すれば、A→Bへの型式的移行過程が思料される。わずかな時間的差異が見られるものの、13C中頃～14Cの年代を与えて大過ないものと思われる。

（3はS P-12、他は遺物包含層出土）

#### 瓦器椀

15. 内面の暗文が退化し、矮小化・粗雑化してゆく終末段階に近いタイプである。口縁部は肥厚し、丸くおさめられている。粗雑化する中では、比較的しっかりとしたつくりをしている。

内面から口縁部にかけてヨコナデ調整を施し、外面は未調整である。口径10.2cmを測る。

#### 土釜

10. 内傾する口縁部からなり、口縁部のやや下に狭い下向きの鉢をめぐらす。口縁部内外面はヨコナデ調整、胴部外面は不調整である。胎土は良好で、器面は淡黄褐色を呈す。瓦器釜。  
(包含層)

11. 内傾する口縁部からなり、肩部に幅の狭いやや上向きの鉢をめぐらす。胴部内面はヘラ削り調整、口縁部内外面から胴部外面にかけてヨコナデ調整を施す。瓦器釜。(S P - 2・掘方埋土)

12. 内傾する口縁部の傾きに続けて肩部に幅の狭いやや下向きの鉢をめぐらす。口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。瓦器釜。(包含層)

14. 直立する口縁部からなり、口縁部外面に幅の狭い水平方向の鉢をめぐらす。口縁部内外面はヨコナデ調整を施し、胴部外面は不調整におわる。胎土は砂粒を含み、色調は暗灰色を呈す。瓦器釜。(包含層)

土釜の各形態および製作技法、調整・焼成手法の変化に着目すると、類似したタイプの集合体が明らかにできる。畿内における土釜大別により、13C～14Cにおける津波・山城の分布様相を明確化する糸口を見出せたと考える。  
(註3)

#### 足釜

13. 胴部外面に断面円形の三足を貼りつける形態をもつ。体部内面はハケメ調整を施し、外面は不調整におわる。一部の足部の遺存状況だけでは何とも言えないが、足蓋型式編年から、鉢に接しての足部を直下に貼りつけるタイプが想定できる。又、京都大学教養部構内の遺跡出土(註5)の足釜との調整手法の同一点から、若干の時期差は考えられるものの、13C代の年代を与えて大過ないものと思われる。

#### 国産陶器

16. 備前焼の摺鉢である。体部下半を欠失し、復元口径24cmを測る。10本単位の櫛目を有し、褐灰色に焼成されている。粘土紐を巻き上げ、外面のハケメ調整は粗いヨコナデ・ナデ手法により大部分が消されている。外面口縁部下に色調の変化が明瞭に観察できる。

#### 中国産陶器

17. 白磁四耳壺である。口径9.6cmを測る。胎土は灰白色できめ細かく、極めて薄く施釉され、釉色は乳濁色を帯びている。口縁部は短く、口縁部はくの字状に折り曲げ、端部をそのまま挽き下げ、丸くおさめている。形態分類から、平山紀夫氏の型式編年・I類に相当すると思われる。  
(註7)

18. 龍泉窯系の青磁である。縱方向の沈線により体部内面を5分割し、区画内に割花文様を片切彫りしたものである。胎土は暗灰色できめ細かく、濃緑色の釉が薄く施釉されている。口径16cmを測る。太宰府編年・分類碗I-4-a類に属し、使用年代という問題を別にすると、  
(註8)

遅くとも13C末の段階で見られなくなるタイプである。

19・20・21. 龍泉窯系の青磁である。共に鎬のない蓮弁文様を片切彫りで表現されている。胎土は密で暗灰色を呈し、濃緑色の釉が薄く施釉されている(21)と、密な灰白色の胎土をもち、淡緑色の釉を薄く施釉している(19・20)とに分かれる。又、(21)は蓮弁部の盛り上がりを失っているのに対し、(20)にはそれが見られる。太宰府編年・I-5-a類に属し、14C中半に比定できる。

その他、細片のため図示できなかったが、製塙土器、美濃・瀬戸系のおろし皿(遺物包含層)等も出土している。

註1. 大阪府教育委員会 「陶邑図」 1978

註2. 兵庫県教育委員会 「魚住古窯跡群」 1983

註3. 背原正明 「畿内における中世土器の生産と流通」 「古文化論叢」 1983

註4. 背原正明 「畿内における土器の生産と流通」 「文化財論叢」 奈良国立文化財研究所 1983

註5. 泉裕良・宇野隆文 「京都大学農学部遺跡B G32区の発掘調査」 「京都大学構内遺跡調査研究年報」 1979

註6. 関歎志郎・岡壁寛子 「備前焼ノート」 「考古学雑誌」 1968

註7. 平出紀夫 「白磁四耳壺について」 「古代文化」 1983

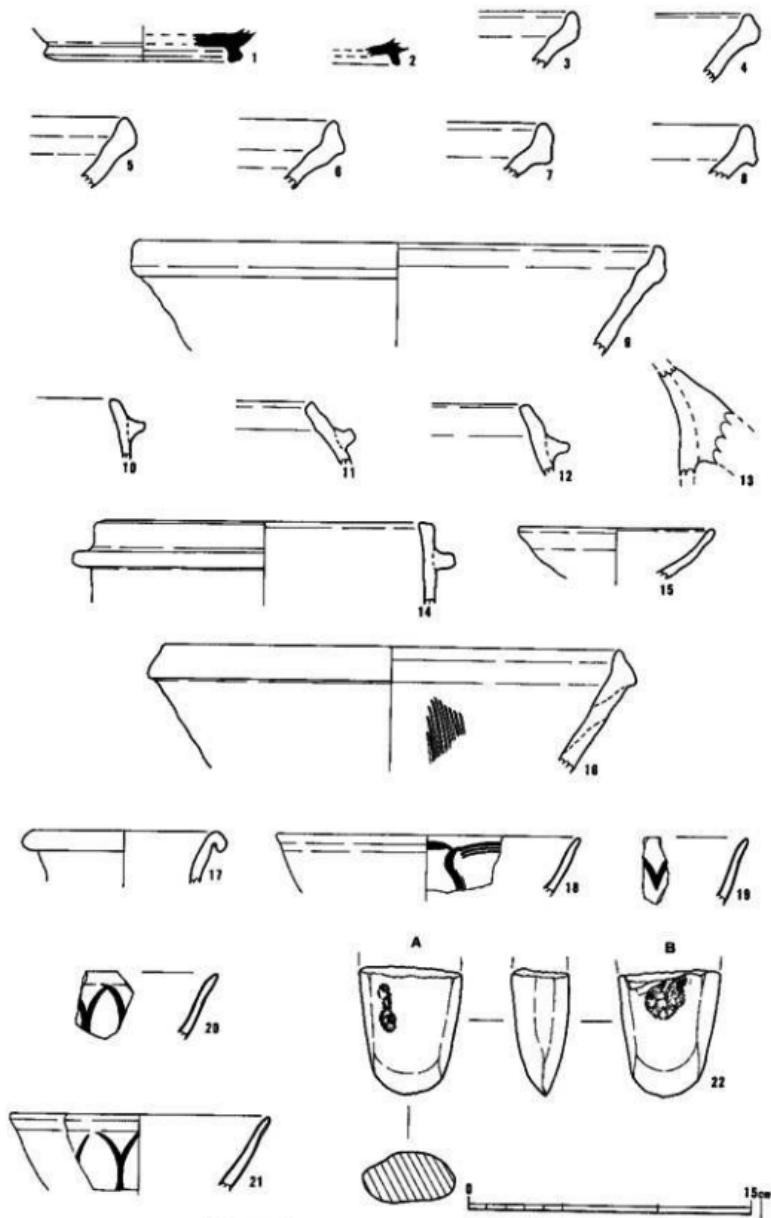
註8. 森田惣一・横田賀次郎 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」 「九州歴史資料館研究論集」 1978

### III. 要 約

萱池北遺跡第2次調査地点の概要報告をI~IIにかけて、記述してきた。宮ノ前台地は從来、弥生時代中期から平安時代にかけての複合遺跡であることが、発掘調査において判明されている。今回の発掘調査当初から先年度に調査を実施した第1地点が隣接する距離間に位置しており、関連遺構の存在も予想された。

しかしながら、今回の調査において検出した遺構は、中世期以降による擾乱によって遺構の残存状態が著しく損なわれていた。残存する遺構は、池田段丘砂礫粘土層を切り込んだ希薄な單一遺構である。出土遺物についても大部分の遺物は年代幅がもたれており、6世紀から15世紀にかけての日常雜器類が包含層内に混在している状況であった。遺構に伴う遺物は、殆んど認められず、遺物にも制約を受けていた。

以上、要約してきたが今後、宮ノ前台地において縦密な遺跡調査を実施することによって遺跡範囲、遺構構造が把握されるであろう。



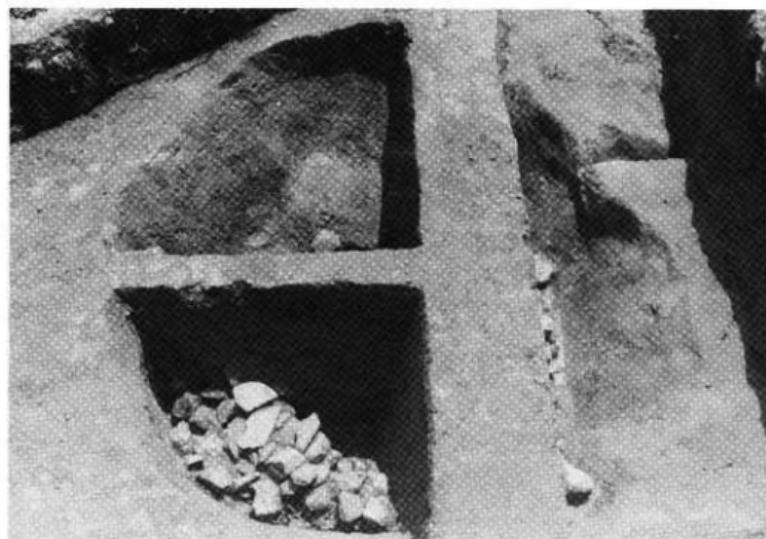
第29図 第2次調査地点 出土遺物実測図



# 図 版



(1) 第1-2トレンチ遺物出土状況



(2) 第1-2トレンチ井戸検出状況



(1) 第2トレンチ造構検出状況



(2) 調査地近景



(1) SK-02断面状況



(2) SK-02遺物出土状況



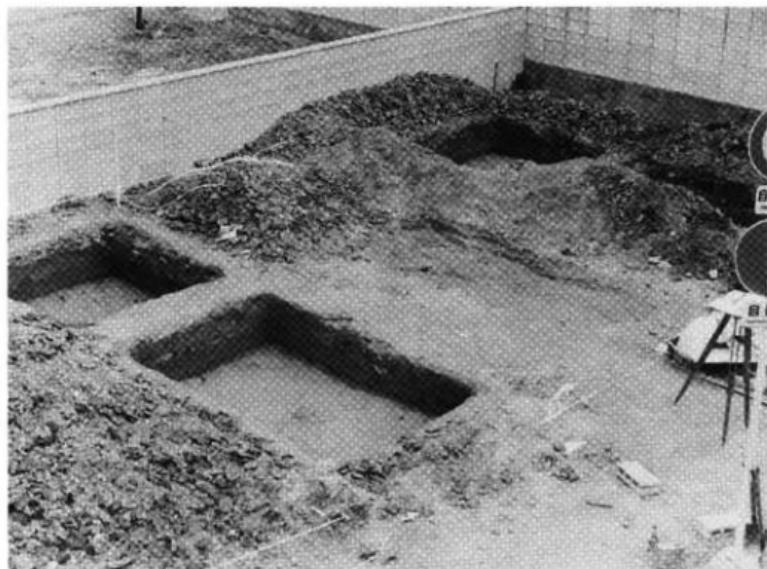
(1) レンチ配置状況



(2) 第1 レンチ遺構検出状況



(1) 調査地近景



(2) グリッド配置状況



(1) 溝状遺構内遺物出土状況



(2) 溝状遺構検出状況



(1) 調査地近景



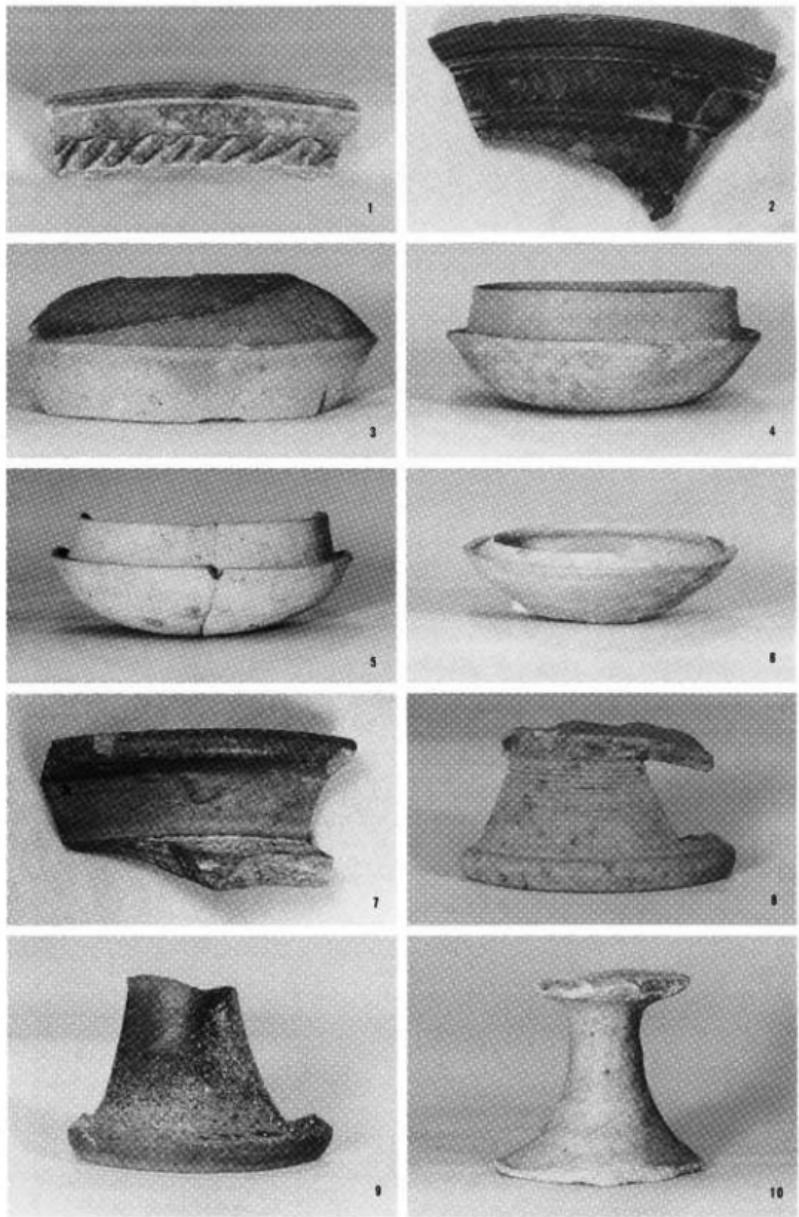
(2) 遺構検出状況

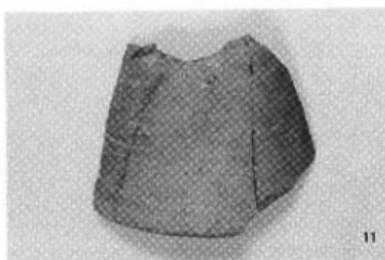


(1) 遺構検出状況（平面）



(2) 遺構検出状況（南方向から）





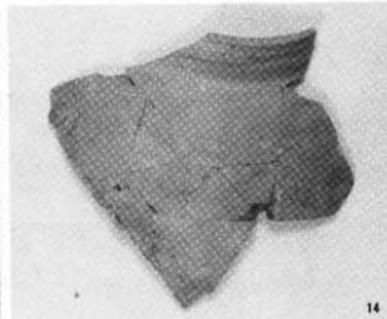
11



12

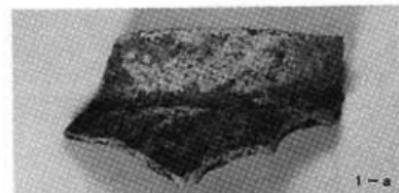


13

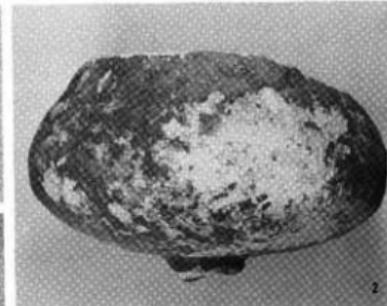


14

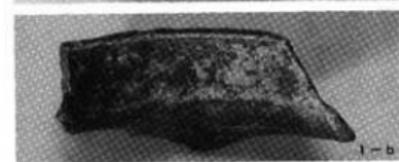
第4次調査地点出土遺物



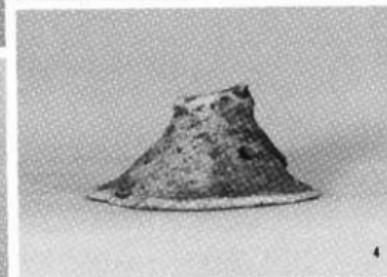
1-a



2



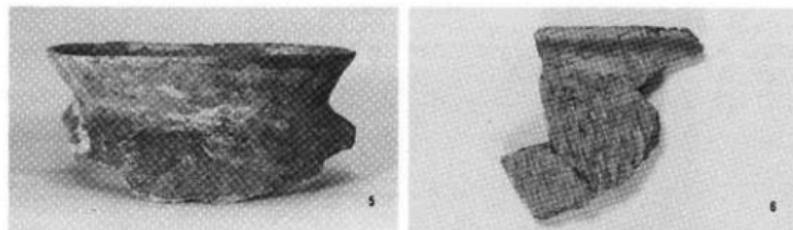
1-b



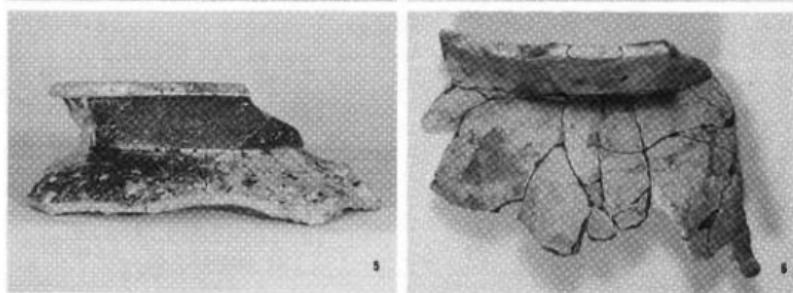
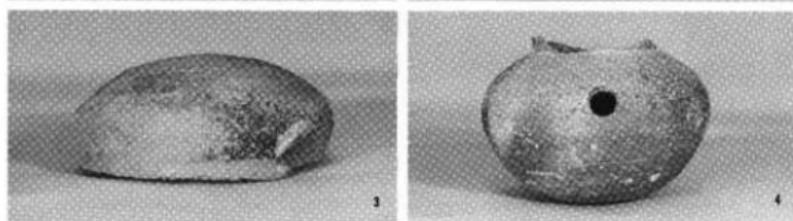
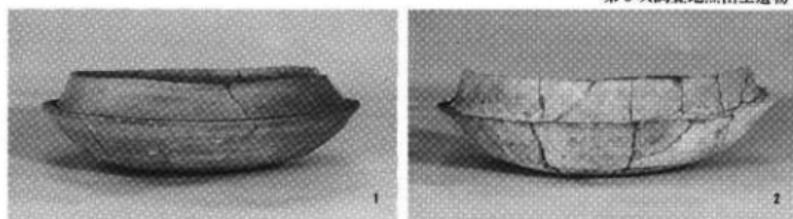
3

第6次調査地点出土遺物

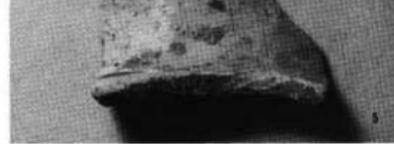
圖版 11  
新免遺跡第6次・第8次調査地点出土遺物



第6次調査地点出土遺物



第8次調査地点出土遺物





豊中市文化財調査報告第12集  
豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1984年3月

発行 豊中市教育委員会  
豊中市中桜塚3丁目1-1  
編集 社会教育課文化係  
印刷 やまかつ株式会社